『語用論研究』第 12 号(2010 年) pp. 1-18
© 2010 年　日本語用論学会

# DM *look* の手続き的意味

西　川　眞由美
摂南大学

This paper discusses the role of the discourse marker (henceforth DM) *look*, which is clearly derived from the verb *look*. This usage of *look* is often observed in making requests or suggestions, changing topics, disagreeing, apologizing and persuading. The aim of this paper is to explore, using the relevance theoretic framework (Sperber and Wilson 1986/95), the cognitive function of the DM *look* in the interpretation of *look*-marked utterances. I will demonstrate that this marker encodes a procedural rather than a conceptual meaning; i.e., it guides the hearer to interpret the utterance following DM *look* as contrary or new to the (ideational, affective or topical) assumption that the hearer has prior to the utterance.

キーワード：　談話標識 (DM)、関連性理論、手続き的意味

## 1.　はじめに

会話でしばしば使われる英語の動詞 *look* は、*see* や *watch* と同様、視覚をあらわす知覚動詞のひとつで、もともと「(何かを見るために) 意図的にある方向に目を向ける」という意味を持つ。また、*look* は、*seem* や *appear* と同様、ある人や事物についての話し手自身の見方について述べる用法があり、「(ある人や物事などが) ある様子を表している」といった意味を持つ。この意味は上の基本的意味と同様、視覚に関しても用いられる。さらに、それには、他動詞用法として、「(感情や気持ちを) 目で示す」の意味もある (例：*look* one's surprise (ジーニアス英和辞典第 4 版))。このように、*look* は本来話し手の視覚による認識に関する意味を表す語である。[1]

しかしながら、会話の中では、このような視覚に関する意味が非常に希薄になった

* 本稿は、西川 (2008) を発展させ、日本語用論学会第 11 回大会 (2008 年 12 月、於松山大学) において発表した内容を加筆・修正したものである。修正時に丁寧にご指導いただいた林宅男先生を含め、論文編集委員の先生方と査読委員の先生方に心から感謝申し上げたい。

[1] 以上の動詞 *look* の意味に関しては小西 (編) (1980: 889-890) 他参照。

*look* の例が観察される。次の例でこの点を見てみよう。[2]

(1) ［メアリー とトムが公園を散歩していると、草むらからウサギが顔を出す］
Tom: *Look*! It's a rabbit!

(2) Mary: Did you meet someone in the park yesterday?
Tom: Not exactly. I just found a rabbit and played with it.
Mary: Well ... I don't know.
Tom: *Look*! It was only a rabbit!

(1) では、トムはメアリーに「(草むらから顔を出している動物を) 見て」という意味で *look* を使用しており、これは明らかに動詞 *look* の命令形である。一方、(2) では、トムはメアリーに何かを「見て」と命令しているわけではなく、「(君は昨日僕が公園で女の子と一緒にいたと思っているようだけど、そうではなくて) ウサギだよ」という内容を伝える場面で、その前置きとして、「ちょっと待てよ」、「おいおい」といったような意味で *look* を使用している。そこでは、「見る」という意味が記号化された動詞 *look* のもともとの基本的意味を命令形として使っているとは考えられない。

上で見た *look* の基本的ではない意味を持つ用法について、EFL 用英英辞書では、「話し手がこれから述べようとしていることに相手の注意を引くために用いられる」、「その際話し手の苛立ちを表す」のような語義説明が見られ、下記のような用例が挙げられている。[3]

(3) *Look*, I think we should go now. (*OALD7*)
(4) *Look*. Why don't we meet for a drink and talk about it then? (*MED*)
(5) *Look*, I've already told you it's not possible. (*CALD2*)
(6) *Look*, I'm sorry. I didn't mean it. (*COBUILD5*)

---

[2] 本稿の英語例文において、出典を明記しないものは作例で、全てネイティブ・チェック済みである。

[3] このような *look* の用法についての、主な EFL 用英英辞書の記述は以下の通りである。*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* (*OALD7*) では、"used to make sb pay attention to what you are going to say, often when you are annoyed"、*Collins Cobuild Advanced Learner's English Dictionary* (*COBUILD5*) では、"You say look when you want someone to pay attention to you because you are going to say something important"、*Longman Dictionary of Contemporary English* (*LDOCE4*) では、"used to get someone's attention so that you can suggest something or tell them something"、*Macmillan English Dictionary* (*MED*) では、"use for making a suggestion or when you want someone to pay attention to what you are going to say"、*Cambridge Advanced Learner's Dictionary* (*CALD2*) では、"used to express annoyance"。いずれも、このような *look* は「何かを提示するにあたって相手の注意を引く」、あるいは「苛立ちを表す」ために使用されるとしている。

(3) では、「ねえ、そろそろ行かないと」と相手にその場を切り上げるよう促す場面で、(4) では、「ねえ、それについては、ちょっと一杯飲みながら話さないか」と相手を誘う場面で *look* が使用されている。(5) では、「おいおい、それは無理だと言っただろう」と相手を諭す場面で、(6) では、「いやはや、悪かった、そんなつもりじゃなかったんだ」と相手に謝罪する場面で *look* が使用されている。いずれの例でも、話し手は相手に何かを「見る」よう命令しているのではなく、「ねえ」あるいは「ちょっと」と、これから述べることに聞き手の注意を向けるために使用している。しかしながら、聞き手の注意を引くためだけなら他にもさまざまな表現があり、これらの辞書における *look* の定義はその意味や機能を十分に説明しているとは考えられない。[4] また、*OALD7* や *CALD2* などの辞書では、なぜ *look* は話し手が苛立っているときに頻繁に使用されるのかに関しても何も述べられていない。

このような用例で使用される *look* については、西川 (2008: 155; 2009: 80) は、下の (7) のような特徴を指摘した。

(7) a. 動詞 *look* が本来持つ「見る（ある方向に目を向ける）」という視覚的意味を持たない。
b. 文頭に生起することが多い。
c. 過去形などに変化せず常に原形で用いられる。
d. *don't look* のように否定命令形を作らない。
e. 方向などを表す様々な前置詞(句)と共起しない。
f. 関連する後続発話を伴う。
g. 原則として気軽でくだけた会話において生起する。

本稿では、この観察に基づき、「見る」という動詞 *look* 本来の意味から離脱して後続発話を伴って使用される *look* を談話標識の *look*（以後 DM *look* と略す）とみなし、それが談話でどのような意味を持つかを詳しく考察する。[5]

談話標識 (discourse marker、以後 DM と称す)、あるいは、語用論標識 (pragmatic

[4] *now*、*listen*、*see* なども聞き手の注意を促す談話標識（あるいは語用論標識）として分析されている (Fries 1952: 103; Aijmer 2002, 2010 等参照)。

[5] 談話標識 (DM) という用語は統一された理論的定義を持たない。本稿では、Schourup (1999: 230–4) で示された特徴 (connectivity, optionality, non-truth-conditionality, weak clause association, initiality, orality, multi-categoriality) と、「何らかの制約を課すことによって、聞き手に主発話を話し手の意図した方向で解釈させるように仕向ける表現」という定義に基づいて DM という語を使用する。

marker）として使用されるいわゆる *look* 形式（*look*-form）と呼ばれる一連の言語項目（*lookit*, *look to it*（*that*）, *looky*, *look you*, *look here* 等）に関しては、歴史語用論の分野でその文法化（grammaticalization）や機能に関しさまざまな考察がなされてきた（Hopper and Traugott 1993; Brinton 2001; Schourup 2004; 福本 2006 等）。しかしながら、現代英語の話し言葉で頻繁に使用される DM *look* についての共時的研究は、それらの機能を単なる注意喚起語（attention-getter）としてのみ言及する（Fries 1952; Aijmer 2010）以外、ほとんど無い。本稿では、現代英語における DM *look* が、どのような状況で頻繁に生起し、また談話の中でどのような機能を持つのかをさまざまな事例から考察する。ここでは特に、DM *look* が記号化する機能的な意味は関連性理論（relevance theory、Sperber and Wilson 1986/95）の「手続き的意味（procedural meaning）」という概念を使うことで説明できること、また、そうして DM *look* の中核的意味を特定することにより、従来単に注意を喚起するものとされてきた *look* がさまざまな文脈の中で果たす役割を統一的に説明できることを示す。[6]

## 2. DM *look* の事例

本節では、英語映画の台本の中の会話から DM *look* が使われた事例を取り上げ、主にどのような状況で使用されているのか、また、それぞれのやり取りにおいてどのような役割を果たしているのかを詳細に分析する（用例中の斜字・太字は全て筆者による）。[7]

### 2.1. 依頼・命令の場面での使用

まず、DM *look* は、話し手が聞き手に何かを依頼したり、命令や勧誘したりする場面で頻繁に観察される。以下の例でこの点を示す。

(8) Oda Mae: Molly, I know what you think of me. I know what you think of me but ***look***, you gotta talk to me. You are in serious danger. I got Sam here with me. We gotta come in and talk to you.

(*Ghost* [movie script])

(9) Carl: I'll kill her, Sam. I swear to God I'll kill her! Just ... ***Look***, just give me the check, Sam, Okay? I promise you I'll let her go if you just give it to me. Okay? Sam? Sam? (*ibid.*)

---

[6] 手続き的意味に関する詳しい説明は、Wilson and Sperber（1993: 10）を参照。

[7] 第二節における以下の分析は、西川（2008: 155–161; 2009: 80–83）に基づいている。

(8) は、友人であり同僚でもあるカールに裏切られ、殺されてゴーストになったサムが、同様の危険にさらされている恋人モリーを助けるために、霊媒師のオダ・マエを使って危険が迫っていることを彼女に知らせようとする場面である。何が起こっているのか何もわからず、逆に見ず知らずの黒人女性オダ・マエのことを疑って耳を貸そうとしないモリーに対し、オダ・マエはDM *look* を用いて自分の話を聞くよう強く要請している。(9) は、会社の金を不当に扱い、そのせいで同僚のサムを死に追いやるはめになってしまったカールが、先回りしてその金を引き出したサムにその小切手を渡せと迫る場面である。ここでは、サムの恋人モリーを人質に取り、サムが全く小切手を渡す気が無いことを知りながらも強く要求し続ける場面でDM *look* が使われている。次の (10)、(11) も同じような用法で、これは、妻と一緒にデパートへ家族へのクリスマスプレゼントを買いに行ったハリーが、妻が他の用事をしている間に愛人へのネックレスを買おうとする場面である。

(10) Rufus: Just pop it in the box ... there.
Harry: ***Look***, could we be quite quick.
Rufus: Certainly, sir. Ready in the flashiest of flashes.
(*Love Actually* [movie script])

(11) Harry: ***Look***, actually, I don't need a bag. I can just put it in my pocket. (*ibid.*)

(10) では、妻が戻る前に恋人へのプレゼントの買い物を済ませようと焦っているハリーが、悠長に包装に時間をかける店員ルーファスに対してDM *look* を使い、包装にそれほど凝らなくてもよいから早くしてくれるよう強く頼んでいる。(11) は、(10) の直後のハリーのせりふで、ハリーがかなり焦っていることを一向気にせず、さらに包装に時間を費やすルーファスに対して、ハリーは苛立ちながら「そんな袋なんか要らないから、とにかく急いで品物を渡してくれ」と再度催促する場面でDM *look* が使用されている。

いずれの例でも、話し手は、依頼や命令によって実現させようとしている自分の考えが聞き手の認識に無いことに気がつき、それをする前にDM *look* を使うことで聞き手の注意を後続発話へとひきつけている。また、そうすることで相手にそれに続く依頼や命令の内容を効果的に伝えようとしていると考えられる。

### 2.2. 話題の転換の場面での使用

DM *look* は、話し手が、今話している内容から故意に話題をそらせようとするときにも頻繁に用いられる。次例を見てみる。

(12) Nick: You have a boy friend? You're only thirteen years old.
Alex: Am I? I thought I was fifteen.
Nick: We're gonna be fine.

Alex: Ah, ***look***. I'm gonna meet Cameron. Is it okay if I meet dad back at his place? (*What Women Want* [movie script])

(13) George: If you need help with them, I could do that.
Erin: I'm not leaving my kids with you.
George: Why?
Erin: I don't even know you.
George: Well, what do you want to know? Ask me.
Erin: ***Look***, thanks for today. (*Erin Brockovich* [movie script])

(12) は、母親が再婚し新婚旅行に行っている間、別居している父親ニックと暮らすことになった娘のアレックスが、久しぶりに父親と会話する場面である。なかなか話がかみ合わず、ニックが何とか話をあわせようと懸命になる中で、娘のアレックスは突然ボーイフレンドのキャメロンとの約束の話を持ち出している。当然今の会話が続くものと思っている両親（ニックと母親）に対して、アレックスはDM *look* を使用し、彼らの注意を他に向けつつ、うまく話題を切り替えている。(13) は、法律事務所で働くことになったシングルマザーのエリンが、たまたまベビーシッターに予定より早めに家に帰された3人の子供たちの世話をしてくれた見慣れない隣人ジョージと話している場面である。ジョージは「必要なら、これからも子供たちの世話をするよ」とエリンに申し出るが、エリンは良く知りもしない人間に大事な子供を任せることはできないと断る。エリンがもうこれ以上その話題を続けたくないと思っているにもかかわらず「自分のことならなんでも聞いてくれ」としつこく食い下がるジョージに対して、エリンは戦略的にDM *look* を用いてその話題から離れようとするのである。

いずれの例でも、話し手は、今の話題を変えたいという自分の気持ちを相手が理解していないという状況で、DM *look* を使用し、聞き手の注意を別の方向に移動させ、強引に、しかしさりげなく話題の転換を図ろうとしていると考えられる。

### 2.3. 謝罪の場面での使用

「いやはや、（誠に）申し訳ない」というような真剣な態度で謝罪をする前にもDM *look* は頻繁に用いられる。

(14) Erin: Isn't it funny some people go out of their way to help people and others must fire them?
Ed: ***Look***, I'm sorry. You were gone. I just assumed you were off having fun. (*ibid.*)

(15) Oda Mae: I don't know you. I don't know this guy, Sam. But let me tell you what he did to me, He kept me up all night singing "I'm Henry the

Eighth, I AM".

Molly: That's how he got me to go out with him. ***Look***, I, I'm sorry. I just ... just don't believe in this life after death stuff.

(*Ghost* [movie script])

(14) は、無断欠勤をしたとしてエリンを解雇処分にした法律事務所の所長エドが、実は彼女が調査に飛び回っていたということを知って、真摯な態度で謝罪する場面である。突然の不当な解雇に立腹している彼女を前にし、「誤解して申し訳なかった」という自分の思いが彼女の頭の中にはないだろうと考えたエドは、謝罪の前に DM *look* を使用している。(15) は、なかなかオダ・マエを信用しなかったモリーが話を聞くにつれだんだん彼女を信じるようになり、ついに彼女を疑っていたことを謝罪する場面である。「今まで疑っていて悪かった」という自分の思いが相手の想定にはないとわかっている状況で、モリーは DM *look* を使用し、謝罪をより印象深いものにしている。

いずれの例でも、DM *look* は、話し手が、自分の申し訳ないという思いが聞き手の想定にない状況で謝罪をするときに用いられている。自分が悪かったと思っていることに相手が気づいていないことを知っている話し手は、DM *look* を使用することで、相手に、次に（相手が期待したことではなく）これまでとは異なる内容のことを述べようとしていることを暗にほのめかし、自分の真剣な謝罪の気持ちがスムーズに受け入れられるようにしていると考えられる。

### 2.4. 説得・反論の場面での使用

DM *look* は、「あのね」、「つまりね」と話し手が自分の意見を強く主張することによって相手を説得したり、相手の意見に異議をとなえるときにも使用される。次の例を見てみる。

(16) Erica: Oh God. What is this? Okay, you stay right where you are. We have a knife.

Harry: Do you ... live here?

Erica: ***Look***, Mister, I'm gonna dial 911 and you're not gonna move. Zoe, hand me the phone.

Harry: You don't understand. I'm a friend of your daughter's.

(*Something's Gotta Give* [movie script])

(17) Sean: I don't give up that easily. One of these days ... I'm gonna convince you to have dinner with me.

Kate: ***Look***, Sean, I think you should know I don't generally do that.

(*No Reservation* [movie script])

(16) は、散歩から帰ってきたエリカが、自分の別荘の冷蔵庫を開けている男性が娘のボーイフレンドのハリーであるとも知らず、彼を不法侵入者と間違え警察に電話をする場面である。ハリーも、恋人の母親が来ていることを知らず、驚くエリカに向かって「ここにお住まいですか」ととぼけた質問をしようとする。エリカは、警察に通報しようとする自分たちのせっぱ詰った思いを相手がわかっていないことを知って、じたばたしないよう諭す場面でDM *look* を使っている。(17) は、しつこくデートに誘う階下の住人ショーンに対して、ケイトが、自分はその気は無いから誘わないように説得する場面である。ケイトは付き合うつもりはないことをショーンがきちんと理解していないことを知り、DM *look* を使って自分の意志を伝えている。

さらに次例を考える。

(18) Sam: So you've gotta warn her.
Oda Mae: And just what makes you think she's gonna listen to me?
Sam: It's just a phone call. ***Look***, you're all I've got. Now, I'm not leaving until you help me. I, I don't care how long it takes 'cause I can talk forever. (*Ghost* [movie script])

(19) Carl: Come on Mol. Just for a walk. It'd be good for you to get out.
Molly: I don't want to.
Carl: Molly, you cant stay in here all day It's not healthy for you.
Molly: ***Look***, Carl, I can't do it. (*ibid.*)

(18) は、ゴーストのサムが恋人に危険が迫っていることを知らせてくれるよう霊媒師のオダ・マエに頼む場面である。オダ・マエがなかなか応じようとしない中、「君しか頼れる人がいないんだ」とサムが必死に説得を試みる場面でDM *look* が使用されている。(19) は、恋人のサムを失った悲しい気持ちも察しないで執拗に散歩に誘うカールに対して、モリーが強い調子で断る場面である。まだ散歩をするような気分にならないという自分の気持ちをカールが十分に理解していないことに気づいたモリーは、DM *look* を前に置いて相手に強く反論し、申し出を断っている。カールに自分は相手とは全く反対の気持ちを持っているということを指示することで、彼女の「行きたくない」という発話をスムーズに解釈するよう仕向けていると考えられる。

これらの例では、話し手は、DM *look* を使用することで聞き手に強い反対の内容（感情）を伝えようとしているということを暗にほのめかし、自分の気持ちがスムーズに受け入れられるようにしていると考えられる。

## 3. 談話連結詞と手続き的意味

上で見てきたように、DM *look* は、話し手がこれから伝達しようとする内容が聞き手の（観念的、情意的、あるいは談話トピック上の）想定の外にある場合に、相手にその後の発話をスムーズに解釈させようとして使用されていると言える。さらに、後続発話に何らかの解釈的制約を課す DM *look* のこのような機能的な意味は、文脈に関わらず常に存在するので、動詞 *look* から語用論的に派生した意味ではなく、それ自体に意味論的に記号化されていると考えられる。以下、ここでは、DM *look* に付与された記号的意味について、関連性理論の観点から詳しく検討する。

Blakemore（1987, 1988, 1992, 2002）は、発話の命題的意味に直接関わらない *so* や *but* のような語を談話連結詞（discourse connective）と呼び、関連性理論の枠組みで画期的な考察を行っている。語に意味論的に記号化された意味を概念的意味（conceptual meaning）と手続き的意味（procedural meaning）に区別し、前者は操作を受ける概念に関する情報、後者は概念の操作自体に関わる意味とした（Wilson and Sperber 1993: 10）。そして、談話連結詞を、"expressions that constrain the interpretation of the utterances that contain them by virtue of the inferential connections they express（それらが表出する推論関係によって、それらを含む発話の解釈に制約を課す表現）"（Blakemore 1987: 105）と定義づけ、発話解釈における推論段階に制約を課す手続き的意味を記号化する語であると分析した。また、それらは記号化された制約によって認知効果（cognitive effect）やその認知効果を有効にする文脈（context）を特定し、そうすることにより解釈にかかる聞き手の処理労力（processing effort）を削減することで関連性（relevance）を有すると説明している（Blakemore 1987: 77, 1988, 1992, 2002 参照）。[8]

談話連結詞の *so* と *after all* の例を見てみる。

(20) Tom can open Bill's safe. He knows the combination.

---

[8] 関連性理論では、「文脈」とは発話を解釈するにあたって聞き手の使用可能な想定集合を指す。「関連性」とはヒトの認知環境が修正されることであり、発話解釈に必要な処理労力と発話から得られる認知効果のバランスによって関連性の程度が決まる。処理労力が一定であれば、認知効果の多い発話の方が関連性が高く、認知効果が一定であれば、処理労力の少ない発話の方が関連性は高くなる。「認知効果」とは、発話を解釈することによって聞き手の認知環境が修正されることであり、それには、①認知環境に新しい想定を与える、②ある想定を強める、③ある想定に矛盾する想定を削除する、という三つの効果が想定されている（Sperber and Wilson 1986/95: 108–37 参照）。関連性への意味論的制約という概念は、Blakemore（1987, 1988, 1992）では認知効果への制約だけが述べられ、文脈への制約は派生的とされた。しかし、Blakemore（2002）の *but*、*however*、*nevertheless* の分析においてはそれが文脈への制約を含むところまで拡張されている（Blakemore 2002: 4, 122 参照）。

(21) Tom can open Bill's safe. *So* he knows the combination.

(22) Tom can open Bill's safe. *After all* he knows the combination.

(Blakemore 2002: 78–79)

(20) は二つの解釈の可能性を持ち、第一発話と第二発話によって伝達される意味の関係は曖昧である。一つは、第一発話が第二発話から引き出される結論の証拠となっているというものである。もう一つの解釈は、第一発話が第二発話によって与えられる証拠によって確認されているというものである。一方、(21) と (22) では、*so* や *after all* を入れることによって、二つの発話の意味的関係が明らかになっている。(21) では、「トムがビルの金庫を開けられる」のは「トムが金庫の番号を知っている」という結論の証拠だと解釈される。(22) では、「トムがビルの金庫を開けられる」のは、話し手と聞き手の間で共有されている「トムが金庫の番号を知っている」という想定によって確認されると解釈されるのである。*so* も *after all* も発話の真理条件 (truth condition) に関与せず、ただ聞き手が話し手によって意図された方法で発話を解釈するよう何らかの指示を出すことによって発話解釈の推論段階に制約を課しているのである。

Blakemore は、談話連結詞 *so* と *after all* の手続き的意味を次のように規定している。

(23) 談話連結詞 *so* と *after all* の手続き的意味

a. "Process the utterance following *so* as an implicated conclusion."

b. "Process the utterance following *after all* as a justification."

(Blakemore 1987: 77)

また、Blakemore は、談話連結詞がその文脈の中でこれから導入する発話の解釈を制約する構造を認知効果の種類に基づいて3つのタイプに分類し、*so* は文脈含意の導入、*after all* は先行想定の強化という認知効果を特定し、そうすることにより処理労力を減じることで関連性を有すると分析している (1992: 137–142)。

これらの談話連結詞と DM *look* の間には、いくつかの共通点がみられる。第一に、先行発話や文脈から得られた想定・情報・命題内容を後続発話の解釈に結び付けている。*so* と *after all* の例では、それぞれ、後続発話で導入する内容は直前の発話内容や先行文脈など、あるいはその時点で話し手が受け取った想定から推論された結論、あるいは共有された証拠であるという意味で関連付けられている。DM *look* の場合も、後続発話で導入される内容は、その時点で聞き手が抱いている何らかの想定とは異なるものであるという意味で関連付けられているのである。第二に、*so*、*after all*、*look* の意味は非真理条件的である。つまり、それ自体真理条件を持たないし、主発話の真理条件にも関与しない。この点も、概念自体ではなく、その解釈の操作に関わる DM *look* にも当てはまる。第三に、これらはいずれも合成性 (compositionality) を持たない。つまり、修飾関係を表すいかな

る語(句)とも共起しない(**very so*、**just after all*、**look carefully*)。第四に、これらは両方とも論理的特性を持たない。否定や矛盾といった論理的関係に関与しない。[9] 以上、これらのことから、DM *look* の意味は、談話連結詞の *so* や *after all* と同様、手続き的意味という概念で考察するのが妥当であると考えられる。

## 4. DM *look* の手続き的意味

### 4.1. DM *look* の意味定義と関連性

前節では、DM *look* の意味を(動詞 *look* の意味と異なり)概念的意味というよりも手続き的意味の記号化として捉えることの妥当性を述べた。では、DM *look* はどのような手続き的意味を持つのだろうか。その手続き的意味は、動詞 *look* の意味とどのような関わりを持つのだろうか。さらに、DM *look* は関連性理論の枠組みでどのような関連性を持つのだろうか。第二節では、DM *look* は、後続発話を十分理解させるためにこれから導入する内容に注意を向けさせる場面で使われていることを見た。ここでは、このような DM *look* の意味が、動詞 *look* の「(何かを見るために)意図的にある方向に目を向ける」という視覚的な意味が認識的な意味に変化したものであること、また、話し手が伝えようとしている内容が聞き手の現時点での想定とは異なることを示すことでその解釈に制約を課し、そうすることにより聞き手の処理労力を削減する機能を持っていることを主張する。

その機能を検討するにあたって、まず最初に、動詞 *look* の命令形が、DM *look* の場合と同様、後続発話を伴って単独で生起する (24) のような場合を考えてみる。

(24) (A) *Look*! B (A は発話時において相手が目を向けている方向、B は後続発話)

この場合、話し手はどのような理由で *look* の命令形を使用しているのであろうか。それは、話し手は、相手が A の方向を見ていることを知り、A とは異なる方向(願わくばこれから導入しようとする内容に関連する方向)に視線を移すよう指示しておくほうが、今から導入しようとする発話 B の内容を相手が効率よく解釈できると考えているからである。(25) の具体例でこのことを更に考えてみる。

(25) (トムとボブがメアリーを待っている。メアリーが駅の方からこちらに歩いてくる。ボブが公園の方を見ているトムに向かって言う。)
*Look*! There she comes!

[9] 手続き的意味の性質に関しては、Wilson and Sperber 1993 など参照。

(25) では、トムの視線が駅から歩いてくるメアリーの方向ではなく公園の方に向けられていることを認識している話し手ボブが、*Look*! と言うことでそのときのトムの視線を別の方向に向けるよう指示し、その後、「彼女が来たよ！」という発話を使ってメアリーに関する事象の情報を伝えている。つまり、この場合、動詞 *look* の命令形を使用することによって相手の注意を喚起し、視線を今とは異なる、あるいは特定の（これから発話で導入しようとしている）ある事象に移動するよう指示しておくことによって、後続発話を即座に理解するだけの準備を相手にさせ、話し手が伝達したい情報内容そのものを聞き手が十分に解釈できるようにしているのである。

上で示した動詞 *look* の視覚レベルでの機能は、DM *look* が持つ認識レベルでの機能にも当てはまる。例えば、次の例を見てみる。

(26) A: You don't need to bring so many coats.
B: *Look*, it gets very cold there this time of year.

(26) では、B は、「そんなにたくさん上着を持っていく必要はない」という A の発話から、A は「これから行こうとしている場所はこの時期は寒い」という知識（考え）を持っていないこと（あるいは、それとは反対の内容の知識を持っていること）に気づき、それを伝える前に DM *look* を使用している。ここでは、B は DM *look* を使うことにより、自分は、A が今持っていない（あるいは A とは反対の）考えを持っているという解釈をするように仕向けているのである。すなわち、DM *look* の使用でこれから述べようとしていることに認識を移すよう促し、「この時期、そこはとても寒くなってきているから」と言うことで、「上着を多めに持っていく必要がある」という（相手とは正反対の）自分の考えを伝えようとしているのである。

以上の考察に基づき、DM *look* の手続き的意味として (27) を提案する。

(27) DM *look* が記号化する手続き的意味
「聞き手は、Q を、P とは異なる内容のもの（発話前に無なかったもの、あるいはそれとは反対のもの）として解釈せよ」
P： 話し手がその発話時に聞き手が持っていると考えている（観念、感情、談話のトピック等に関する）想定
Q： DM *look* に後続する発話

この定義から、DM *look* は次のような機能を持つと言える。DM *look* はもともと命令形という形を取ることから、それは第一に、話し手が意図的に発話時点での聞き手の考えや思い、関心を今とは異なる（Q という特定の）ものに向かわせる（あるいは向かわせるように注意を喚起する）という機能を持つと考えられる。話し手は、聞き手が今から伝えようとしている内容とは異なる想定を持っていたり、それに固執している場合には、自身

の発話の解釈の妨げになると判断し、こうした機能を持つ DM *look* を後続発話 **Q** の前に置くことによって、自分の発話をより効率よく理解してもらえるよう仕向けているのである。一方、聞き手の方は、DM *look* のその指示を受け「話し手がこれから伝達しようとしている内容は自分が今考えていることと異なるのだな」という解釈的文脈を構築し、話し手が **Q** で伝達する情報を解釈するための準備にスムーズに入ることができるのである。つまり、DM *look* の関連性は、聞き手の注意を後続発話へと引きよせ、これから導入する内容がちょうど先行文脈から呼び出し可能になったばかりの聞き手の想定を否認するという認知効果を特定することで聞き手の発話解釈における推論段階に制約を課すこと、と同時に、聞き手がその時点で抱いている（と考えられる）想定 P が今から導入しようとしている発話 Q の内容と食い違っているという文脈を特定することで、Q の解釈に要する労力を減じることにあると考えられる。[10]

### 4.2. 説明的原理としての DM *look* の手続き的意味

DM *look* の手続き的意味を（27）のように規定することによって、DM *look* がなぜ第一節で挙げた 7 つの特徴を持つのかや、なぜ第二節で挙げたような状況で頻繁に使用されるのかを説明することが出来る。まず、最初の点について述べる。「DM *look* が記号化するのは（概念ではなく）手続きである」と仮定することにより、意味的・統語的特徴である（7a）、（7c）、（7d）、（7e）を説明することが出来る。（7a）の「動詞 *look* が本来持つ『見る』という視覚的意味を有しない」のは、DM *look* が概念ではなく手続き、つまり概念操作に関する情報を記号化するからである。（7c）の「常に原形で生起し、過去形などに変化しない」のは、もともと動詞 *look* の命令形から派生した DM であることの他、概念を記号化したものではない DM *look* は時制等の概念とは無関係であるからである。（7d）の「否定命令形を作らない」のは、手続き的意味を持つ情報は論理的特性を持たず、否定や

---

[10] *but*、*however*, *nevertheless* なども、主発話の解釈において先行文脈で顕在化された想定の矛盾削除を要求する点では否認を表す DM である（Blakemore 1922, 2002 など参照）。しかしながら、それらが前後の文脈から顕在化される想定の意味的関係を明示的にするために用いられるのに対して、DM *look* は聞き手が現時点で抱いている想定を否認することによって聞き手の注意を後続発話の内容にひきつけるために用いられる点で異なる。*Wait!* や *Come on!* なども、ある文脈で「おいおい（ちょっとまてよ）」「いいかげんにしろ」という意味を持ち、DM *look* 同様先行文脈から認識される相手の考えを否認するときに用いられる。しかしながら、これらは DM *look* と異なり、必ず後続発話を伴うとは限らない。また、DM *look* の場合は、後続発話で伝えようとしている内容は相手が発話時点で抱いている想定と異なるという文脈を設定することでその内容を聞き手が十分に解釈できるように仕向けるという手続き的意味を記号化する表現である。それに対し、*Wait!* や *Come on!* によって伝えられる相手の考えに対する否認は、それぞれの発話から語用論的に導出される推意（概念的意味）とみなされ、それらの関連性はそのような話し手の態度の表明にあるという点で両者は異なる。

矛盾のような関係に関与しないからである。(7e) の「方向などを表す前置詞(句)と共起しない」のは、手続き的意味は合成性を持たず、またDM *look* にはもはや「見る」という概念が無いので、視線の方向を示す必要は無いからである。

さらに、「DM *look* が記号化する手続き的意味は (27) である」と仮定することによって、特徴 (7b)、(7f)、(7g) を説明することが出来る。(7b) の「文頭に生起することが多い」のは、DM *look* は、主発話の解釈に入る前に、話し手が意図的に聞き手に今の考えや思いからいったん離れて別の方向へと視点を移動させる機能を持つので、必ず主発話の前に置かれねばならないからである。従って、主発話の間や後に生起することはない。(7f) のように「関連する後続発話を伴う」のは、DM *look* が導入する後続発話の解釈に当該文脈における相手の想定を関連づける機能を持つからである。(7g) の「原則として気軽でくだけた会話においてのみ生起する」のは、DM *look* の役割が後続発話の解釈において、話し手が意図的に聞き手の視点をいったん別の方向に向けるよう指示をする合図に過ぎないからである。同様の状況で用いられる命令形の *listen* は、「(耳を傾けて) 聞きなさい (そして、これから私が言うことを理解し (信じ) なさい)」というような強い命題的な意味を持つが、DM *look* はここまでの強い意味は持たない。[11] 例えば第二節で見たそれぞれの状況で、DM *look* の代わりに *listen* を使うと、相手に対する命令的な態度が強く伝わり、さりげない話題の転換や相手に対して本当に申し訳ないという真摯な謝罪、さらに対立の危険性のある場面で相手をうまく説得することは難しくなると思われる。一方で、あらたまった公式の場で相手に耳を貸すように促すような場面ではDM *look* より *listen* の方がよく使用されるだろう。[12]

次に、DM *look* がなぜ二節で見たような状況で頻繁に生起するのかを (27) の規定によって説明する。まず、依頼や命令をあらわす発話がなぜDM *look* に後続するのかについて述べる。話し手にとってその依頼や命令がその状況で非常に重要なものであるにもかかわらず、そのような願望を抱いているということを全く考えていない、考えようとしない、あるいは関心が無い聞き手に対して、そのような内容をしっかり解釈をさせるためには、聞き手に一旦今の考えや関心から離れるよう指示することにより、聞き手の注意を後

---

[11] *listen* は動詞 *listen* の命令形で、(どちらかというとまだ) 概念的意味を伝達していると考えられる。その証拠に、*listen* は合成性を持つ。たとえば、*listen* (*carefully*) は *listen to me* (*carefully*), *listen to this* (*carefully*) などのような形でも生起し、同様の機能を有する。Aijmer も、"However *listen* retains more of its meaning as a perceptual verb than *look*." (2010: 173), "Not surprisingly, *listen* is less often described as an attention-getter or a pragmatic marker."(*ibid.*) と述べている。

[12] Aijmer (2010: 171) は、語用論標識 (pragmatic marker) の *look* は会話上の対立より会話参与者間の親密な絆をあらわす標識であるとし、よって直接の対立を脅しとみなす可能性の高いLLC (London Lunt Corpus of Spoken English、討論やデイベートを含む正式・略式の会話のコーパス) のデータで *look* の使用例が少ないのは驚くに値しないと述べている。

続発話へと強くひきつける必要があるからである。例えば、(10) や (11) で、ハリーが焦っていることなどものともせず包装の飾り付けに夢中になっているルーファスに対して、ハリーが自分の依頼内容をルーファスに十分認識させるためには、ルーファスの目下の関心（綺麗に包装すること）を別の方向に向けるよう仕向けることで、包装への執念から一旦離れさせた後依頼を導入するほうがより効果があると考えられる。さらに、DM *look* を使用することによって、強く頼んでいるのに相手が全く聞き入れてくれそうにない状況では、DM *look* と後続発話の内容などから「苛立ち」のような話し手の強い態度が語用論的に導かれる。*OALD7* や *CALD2* の辞書記述に見られるような *look* の使用に伴う話し手の苛立ちは、DM *look* が相手と自分の意見が食い違っているにもかかわらずあえてそれを導入する状況で使用される以上、(場面によっては) おのずと出てくる感情であると考えられる。[13]

第二に、(12)、(13) で見たように、DM *look* は、聞き手がまだまだ今の話題が続くだろうと考えている状況で話題の転換を図ろうとするときにも多用される。発話時点での相手の視点を意図的に全く別の、つまり後続発話で新たに導入しようとしている内容へと向けさせる機能を持つ DM *look* は、話し手が急に、または意図的に新しい話題を導入したり、今の話題を閉じるための都合の良いディバイスである。また、相手はまだこの話を続けたいと思っているかもしれないが、自分はそう思っていないことをあらかじめ示しておくことで、話題転換から来る唐突さを避け、相手に対する気遣いを示すことにもなるであろう。

第三に、話し手が「申し訳ない」と思っていることに全く気づかず、時にその失敗や無礼を聞き手が責めているような状況で謝罪を導入する場面でも、DM *look* は頻繁に使用される。それは、「話し手は自分が悪いとは全く思っていない」と考えている聞き手に「そうではないんだ」ということをあらかじめ示した上で後続発話へと注意を引きよせることで、そこで伝えようとしている謝罪の内容をスムーズに解釈させるためだと考えられる。また、そうすることによって、謝罪が大変真摯なものであることを聞き手に伝達したいからである。例えば、(14) や (15) の各例で、もし DM *look* が無ければ、その謝罪はかなり唐突で、話し手の「本当に申し訳ない」という真剣な態度は十分に伝わらないだろう。

第四に、聞き手のその時点での考えと異なる内容や事柄を強く主張したり、そうすることにより相手を説得するときに DM *look* が使用されることが多い。相手とは相反する意見を導入したり、相手を説き伏せ納得させるためには、今から伝えようとしてる内容が相手の考えと異なることをあらかじめ示しておいてから後続発話へと聞き手の注意を促し、

[13] Aijmer (2010: 172) は、"As an attention-getting signal with the meaning of urgency *look* can implicate impatience and exasperation although these meanings would be less apparent in conversations among equals."と述べ、苛立ちは *look* が比喩的に持つ「緊急性」に起因すると述べている。

そうすることによって自分の主張を十分理解させる準備をする必要があるからである。(18) のような例でも、もしDM *look* が無ければ後続発話だけが非常に唐突に導入されることになり、従って聞き手は十分にその解釈を行えない可能性がある。[14] いずれの場合も自分が導入しようとしている発話の内容が聞き手の想定にないことを認識した話し手は、DM *look* を主発話に先行させ、あらかじめ相手に今抱いている想定から離れて別の視点を持つよう指示を出し、又そうすることでそれと異なる内容を持った後続発話へと強く注意を引きつけることで、重要な情報を効果的に伝達しようとしているのである。

## 5. おわりに

本稿では、DM *look* が聞き手の後続発話の解釈に関してどのような機能を有するかを、関連性理論の認知語用論的枠組みで考察を試みた。DM *look* は、認識そのものに焦点を当てることによって元来の「見る」という意味が薄れ、聞き手にその時点で抱いている考えや思いから離れて視点を一旦別の方向に向かせた後、今から話し手が述べようとしている発話を解釈するよう仕向けるために意図的に用いられる表現であることを、さまざまな用例を使って分析した。そして、そのようなDM *look* の意味は、Blakemore (1987, 1988) によって分析された談話連結詞 *so* や *after all* との類似性により、関連性理論における手続き的意味として記号化されていると分析するのが妥当であることを示した。その上で、DM *look* は、概念的意味を記号化する動詞 *look* と異なり、これから伝達しようとする内容が聞き手の想定外のことであることを認識した話し手が、聞き手を発話時の想定と異なる視点に立って後続発話を解釈するよう導く手続き的意味を記号化していること、さらに、後続発話の解釈において、導入される内容は今聞き手が持っている想定とは異なるものであるという認知効果とそれを保証する文脈を特定することによって処理労力を削減することで関連性を有することを示した。最後に、DM *look* の中核的意味を (27) のように規定する本考察により、DM *look* が持つさまざまな特徴を説明することが可能であり、かつ、なぜ特定の談話の節目に頻繁に生起するのかについても妥当な説明が出来ることを示した。

### 参照文献

Aijmer, K. 2002. *English Discourse Particles*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Co.

---

[14] (16), (17), (19) では、DM *look* とともに呼びかけ語が使用されている。呼びかけ語により、相手の注意を引きつつ、相手が解釈する前に一呼吸おく役割が出てくるので、余り唐突さは感じられない。

Aijmer, K. 2010. "The attention-getting devices *look*, *see* and *listen*." In Martin Procházka, Markéta Malá and Pavlína Šaldová (eds.), *The Prague School and Theories of Structure*, 163–176. Goettingen: V&R unipress.

Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.

Blakemore, D. 1988. "'So' as a Constraint on Relevance." In R. Kempson (ed.), *Mental Representation: The Interface between Language and Reality*, 183–195. Cambridge: CUP.

Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Oxford: Blackwell.

Blakemore, D. 2002. *Relevance and Linguistic Meaning: The Semantics and Pragmatics of Discourse Markers*. Cambridge: CUP.

Brinton, L. J. 2001. "From Matrix Clause to Pragmatic Marker: The History of *look*-forms." *Journal of Historical Pragmatics* 2: 2, 177–199.

Fries, C. C. 1952. *The Structure of English*. New York: Harcourt Brace.

福元広二. 2006.「初期近代英語期における談話標識──look you の文法化について」、広島大学英文学会 51 号、17–29、広島大学英文学会.

Hopper, P. J. and E. C. Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge. CUP.

西川眞由美. 2008.「談話標識 *look* に関する一考察」、*Setsunan Journal of English Education* 2、153–166、摂南大学外国語学部英語教室.

西川眞由美. 2009.「DM *look* の手続き的意味」、日本語用論学会第 11 回大会発表論文集第 4 号、79–86、日本語用論学会.

Schourup, L. 1999. "Discourse Markers." *Lingua* 107, 227–265.

Schourup, L. 2004. "*Lookit* and the History of *look*-forms." 影山 太郎・岸本 秀樹 (編)『日本語の分析と言語類型──柴谷方良教授還暦記念論文集』、543–558、東京：くろしお出版.

Sperber and Wilson. 1986/1995. *Relevance-Communication and Cognition*. London: Blackwell.

Wilson and Sperber. 1993. "Linguistic Form and Relevance." *Lingua* 90, 1–25.

**英和・英英辞書等**

*Cambridge Advanced Learner's Dictionary 2* (*CALD2*). 2005. Cambridge: CUP.

*Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary 5* (*COBUILD5*). 2006. London: Harper-Collins.

ジーニアス英和辞典第 4 版. 2006. 東京：大修館書店.

小西 友七 (編). 1980.『基本動詞辞典』東京：研究社出版.

*Longman Dictionary of Contemporary English 4* (*LDOCE4*). 2003. Edinburgh Gate: Pearson Education Limited.

*Macmillan English Dictionary* (*MED*). 2002. New York: Macmillan.

*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English 7* (*OALD7*). 2005. London: OUP.

**DVD・映画台本**

DHC. 2001. *What Women Want*. Tokyo: DHC Publishing Co., Ltd.

DHC. 2004. *Love Actually*. Tokyo: DHC Publishing Co., Ltd.

"*No Reservation*" DVD. 2007. Castle Rock Entertainment.

Screenplay Corporation. 1995. *Ghost*. Tokyo: Screenplay Publishing Co., Ltd.
Screenplay Corporation. 2000. *Erin Brockovich*. Tokyo: Screenplay Publishing Co., Ltd.
"*Something's Gotta Give*" DVD. 2003. Warner Brothers Pictures and Columbia Pictures.